

未之知也

まだまだこれ知らざるなり

第90回

社会貢献を意識することで勉強へのモチベーションを高められる

前回は啓明学園(東京昭島市)の北原都美子理事長にお話しを伺いました。今回は北原理事長の夫であり、同学園の相談役である、北原福二(ふくじ)相談役にお話を伺います。教職に就くことになった経緯、これまでの指導を通して感じられたことなどを、たっぷり語っていただきました。

話し手・北原福二／聞き手・山田未知之

南極観測隊を目指した若き日

長野県茅野市で生まれ、高校卒業までそこで生活をしました。山に登ると諏訪盆地が一望でき、山と湖と田んぼの色彩やかな景観の美しい街でした。私が通った小学校・中学校・高等学校は並んで建っていました。12年間の学校生活の中で強く印象に残っていることは、中学校の技術家庭の時間に行なった、学校の田んぼでの田植えや稲刈りや、霜が降りる時期に学有林から薪を運ぶことを目的とした、その名も「ストープ用の薪運び」という行事です。今の時代にはなかなか見られない古き良き

時代の学校生活でした。

諏訪湖・霧ヶ峰・八ヶ岳などはもちろんですが、近くの山歩きなど毎週という位に、四季折々の自然の移り変わりを体験する日々でした。授業は特に理科や社会が好きでした。この時分より前に語られていた「大陸移動説がプレートテクトニクス理論」に変わるなど、多くの科学分野で変化がありました。また電子機器が急速に発展する中で観測方法や考え方が大きく変化する時期もありました。世界の国々が参加する国際地球観測年『太陽活動期国際観測：(IGY 1957-1958)、太陽極小期国際観測年：(IQSY 1964-1965)』のニュースが新聞で取り上げられ、「日本も地球観測の一端を担うようになる」との報道にワクワクした思いで記事を見ていました。そして南極観測が国際的に許可されたことでいつか南極観測に参加し、自然科学の発展に関わりたい」と思うようになりました。日本はIGYにおいて南極観測に参加し「昭和基地」の建設などのプロジェクトに参加、自然科学の発展に寄与し、今までの観測技術は素晴らしいものがあります。南極観測に近いことに携わりたい思いもあり、気象研究所に入所しました。

ひよんなきつかけで教育の道へ

上京後、東京理科大学理学部に進学しました。そこで知り合った妻と結婚、妻は啓明学園に勤めるようになりました。妻から啓明学園を設立された三井高維先生の話聞き、感銘を受けたことが多くありました。お会いして三井先生のお仕事や海外のお話を伺う機会を通して、三井先生ご夫妻のお人柄に触れ、次の世代に求められる海外事情のお話に惹かれることばかりでした。このような経緯から、南極観測から私の想いは「学校教育に携わりたい」と大きく変わっていきま

三井先生ご夫妻が学校教育を語る中で「生徒一人一人の個性を伸ばすことに意義があり、それぞれが持つ『夢・希望』に意欲的に取り組めるものを持つて欲しい」と仰っていました。啓明学園を訪問した時、視聴覚機材が少ない時代でしたがOHP・16ミリ映写機や電卓が各教室に数台常備されていました。当時、珍しかったパンチカード入力の計算機も授業の中で使われており驚きを感じました。

そんな折、妻の研究室に入り切っている方から「教員採用を切っていたら、南極観測には区切りをつけ、その方の紹介で芝

中学・高等学校に勤務することになりました。そこには、私が学んだ高校生活とは全く違う「学びの広がり」があり、教科・クラブ活動・生徒との関わりがとても新鮮でした。

妻と一緒にボランティアで補習を実施

三井先生ご夫妻の関心の一つに生徒寮で生活している寮生の生活がありました。イギリスには「プレップスクール」という寮を持つ私立学校があります。イギリス留学から帰ってきた三井先生は、この仕組みを意識してか、生徒の社会進出への機会が必要性と自己の確立を意識して寮を作られたのではないかと私は思っています。三井先生は妻と私に対して、勉強に戸惑っている帰国生である寮生が、「何か自信を持つ機会ができないだろうか」と話しかけられ寮生対象の補習をボランティア

アでするようになりました。三井先生から、「子供たちに指示をするのではなく、寮生自身が『自律・自立』できる意欲を持つ生徒になつて欲しい」ということを何回も聞いておりましたので、『自律』を意識した自習のプログラムを考えることになりました。子供たち自身が19時〜21時の2時間、彼らはそれぞれが2時間の自習内容の計画を立て計画的な学習をするようになり、自習時間が終わると彼らが私たちのものに集まって、自習時間を有効に使えたか、次回の予定などを語る場面もありました。一方、学習時間以外では、彼らと色々な話をし、私が動いていた芝中高の同年代の生徒が、学習や社会の変化をどのように考えているかをいろいろ聞いて、触発される生徒もおりました。

この自習時間は、4月の開始当初は5人ほどしか参加者がおりませんでした。学期の終わりにには寮生のほぼ全員が参加

するまでになりました。2時間の間、それぞれが計画的に教材を準備し、この時間を有効に生かして時間の大切さを理解するきっかけになったと感じました。その結果、寮全体の生活習慣も変わり、それが成功体験となり励みになるなど、好循環になりました。寮母さんからも「最近子供たちが意欲的になりました。朝も時間になるときちんと起きてくるし、寮全体の汚れが少なくなりました。」と言われるようになり、「モチベーションが上がると、考え方もものごとが変わる。」ことを垣間見て、この一瞬に立ち会った私は思春期の子供たちの大きな変化を目の当たりにした想いでした。

社会でいかに貢献するか

人間が社会生活を営むうえで大事なことは、「人を思いやる気持ち」や「コミュニケーション力」であることは明らかです。

う。ただ、いくら「協調心」や「思いやり」の心があっても「思考力」や「基礎力」がないと何をやる上でも通用しません。そして「基礎力」を育てるためには、各々が社会でどう貢献するかを思い描いておく必要があります。

以前の日本には、身近な人に対して将来の『夢・希望』の決意表明をする「立志式」というものがありました。それはひとりひとりが将来どうなりたいかを考え、周囲に発表する機会でした。基礎力を高めるにはモチベーションを高めるには、社会貢献に対する意識が不可欠なのです。

私は強く思います。「できない子供」はいません。子供たちの気づかないものを引き出せるかどうかは「教師の力」なのです。そして子供はいつでも変わることができず、考えを押しつけるのではなく、気がつくまで待つこととの余裕を持ちたいものです。

北原 福二(きたはら・ふくじ)



1943年(昭和18年)長野県生まれ。県立茅野高校を経て東京理科大学理学部入学。在学中に気象庁気象研究所に入所。湿度計の開発など技術職として勤務。71年、芝中学・高等学校に転じ、以後、教職の道を歩むことに。同校で物理の授業を担当していた。芝中学・高等学校に27年間勤務したのち99年、啓明学園中学校高等学校の校長に就任。2006年、本郷中学校・高等学校に教頭、08年に校長に就任。「生徒たちと現場で接点ができるように」と、毎年、中学2年生の理科の授業を担当していた。2016年本郷中学校・高等学校を退職後、2017年、現職に就任し、現在に至る。長年の学校経営の経験を生かし、幼稚園、初等学校、中学校、高等学校において、多岐にわたるサポートを行っている。